

日本宗教学会第 76 回学術大会特別展示 歴史のなかの大学と宗教研究 — 東大宗教学研究室保存資料から —

2017 年 9 月 15 日～9 月 17 日

趣旨説明

「保存資料」というのは実のところ大げさで、展示品の多くは研究室の机の引き出しや棚の中に無雑作に押し込められていたものです。その机や棚も保存用のキャビネットや金庫ではなく、戦前から使われているらしい古びた日用品です。

今回の宗教学会大会では、開催校のミッションの一つは、いわば「サステナブルな学会開催」を考案するというものでした。どの大学も運営が厳しくなり、大規模な学会開催を引き受けにくくなるなかで、いかに学会運営をスリム化しコストダウンするかを考えながら企画することが、実行委員会のタスクとなったのです。コンフェレンス・バッグの省略は言うに及ばず、大会のシンボルマークも作りませんでした。

とはいえ、発表以外の展示やイベントが何もないのも寂しいものです。とくに、あてにしていた安田講堂や総合図書館の新施設の見学が、工事日程の都合で不可能になってしまいました。そこで、原価ゼロでできる展示はないかと考えたところ、ひらめいたのが、研究室内に眠る先代からの数々の“遺品”、研究室の学生・スタッフすら目にすることがないような品々を、“発掘”し、「歴史のなかに」位置づけて、お披露目すること、でした。

したがって、市場に出せば価値がないものばかりですが、院生・学部学生有志が調べ、解説を作っていくうちに、展示もどきのつもりのものがどんどんそれらしくなり、発案者が一番驚いています。「象牙の塔」と見られがちな大学（なかでも文学部は自己認識としてもややその感あり）ですが、所属する宗教学者たちは、決して机に向かって論文を書いていただけではなく、大学の内外でまめに動いていた様子が資料から浮かび上がってきます。

記念品として、発掘品の一つである昭和 5 年に作られたポストカードを復刻しましたのでご自由にお持ち帰りください。それではどうぞ、展示をご覧くださいませよう。

(大会実行委員会 藤原聖子)

展示解題編

姉崎正治関係資料（解題は1～6・10：佐々木弘一、7：藤原聖子、8～9：平田篤志）
2、3、4、5については磯前順一・深澤英隆・高橋原・鈴木健郎・宮崎賢太郎・Annibale Zambarbieri「第四部 姉崎正治関係資料目録」磯前順一・深澤英隆編『近代日本における知識人と宗教』（東京堂出版、2002年）から該当部分を抜粋、6については同書を参照した。10については、高橋原「姉崎正治の国際連盟演説（1936年）」『東京大学宗教学年報』別冊 XXVI、pp. 9-12、2009年を参照。

1 姉崎図書館長肖像画

関東大震災で全焼した東大図書館を復興すべく図書館長に任命された姉崎正治を描いた肖像画。長年の間、本郷キャンパス総合図書館の一室で人知れず眠っていたが、2017年に本研究室出身で東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門副部門長・特任准教授の冨澤かな氏によって発見され、日の目を見ることになった。書架を背景に右腕を机の上においた姉崎の凛とした佇まいが活写されている。なお、本肖像画は東京大学総合図書館所蔵資料の一つであり、この展示に際して、特別に総合図書館からの展示許可を受けたものである。

2 宗教学緒論 自筆原稿

1889年9月28日～1899年5月26日の東大講義。井上哲次郎「比較宗教及東洋哲学」に代わり、初めて東大随意科講師を嘱託された時のもの。章立ては「緒論」「一宗教なる概念の発達と其に伴へる宗教の研究」「二成立的の見解（宗教学概論附録）」「三成立的把住との過渡（折衷的求法渴仰の宗教探求）」「四哲学的把住」「五宗教の科学的研究の準備」「二 [ママ] 比較研究の勃興、比較神話学及比較宗教学」。

（磯前・深澤編、p. 411）

3 姉崎先生講義宗教学概論綱目 講義目次

講義大学・年次不明。目次は「一、総論」「二、心理的事実としての宗教」「三、宗教の倫理と実行活動並に団体組織」「四、宗教の発達」。

（磯前・深澤編、p. 411）

4 William James（ハーバード大教授 哲学）から姉崎宛の書簡（1908年2月4日）

抜刷送付への礼状。ハーバードでの姉崎滞在時に会えなかったことを惜しむ。日米戦争の可能性をめぐる風説を強く批判する。本書簡の翻刻と解説は以下を参照。深澤英隆・村山元理「ウィリアム・ジェイムズと姉崎正治—ジェイムズの姉崎宛書簡」『東京大学宗教学年報9』（別冊）、1994年。

（磯前・深澤編、p. 341）

5 Marcel Mauss

（コレージュ・ド・フランス教授 人類学）から姉崎宛の書簡（1924年3月24日）

自らの弟子で、日本に留学する Haguener について、便宜を請う。

（磯前・深澤編、p. 336）

6 宗教学文献展覧会目録

東大宗教学講座の設立 25 周年を記念して 1930 年 5 月 10 日・11 日に開催された「東京帝国大学文学部宗教学講座創設二十五周年記念会」にて催された、内外の宗教学の歩みを示す展覧会の目録。11 日の協議会において日本宗教学会の設立が決定され、姉崎が会長に就任した。同時開催された記念宗教学大会はのちに第一回宗教学会とみなされるようになる。

(磯前・深澤編、p. 97)

7 日本宗教学会委員会報告・会計報告

「日本宗教学会連絡本部 記録」と題されたノート（記録者は小口偉一）に添付されていた、昭和 12～13 年の資料。

①昭和 12 年 11 月 20 日の委員会開催通知（コピー）

姉崎会長による、12 月 1 日の会議の開催通知。場所は神田学士会館。開催まで 2 週間を切っているが、出欠の返事を送るようにとある。

②昭和 13 年 4 月 6 日の委員会報告（コピー）

①の会議の結果、次回大会の当番校は立教大学になったとある。

右側の郵便振込用紙もご覧いただきたい。当時は会費はこの用紙で郵便振込だったのだろうか？

③昭和 13 年 10 月 29・30 日開催 第 5 回大会プログラム（現物）

そして立教大学で大会が開催された。7 部会構成（宗教学一般／宗教心理学・社会学／宗教哲学・キリスト教学／一般宗教史／日本宗教史・神道学／仏教学第 1／仏教学第 2）。発表順序は名前の A B C 順である。発表キャンセル率は当時の方が高かったようだ。

④『宗教研究』の表紙案（現物）

『宗教研究』は大正 5 年の創刊後、昭和 14 年（1939 年）6 月から刷新され、番号が「季刊 第一年第一輯」と振りなおされた。この表紙案からは、当初は岩波書店から出版することが検討されていたことが窺われる。

⑤昭和 13 年 12 月 8 日の委員会報告（現物）

現在の理事会報告に当たると推定される。役員決定の他、当時は委員に手当てが出されていたことがわかる。学会予算案については、現在のものと比較されたい。

8 姉崎正治直筆『法華経』偈頌

舌相至梵天 身放無数光

舌は梵天に相至り、身は無数の光を放つ。（現代かなづかい表記）

鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』第六卷第二十一品如來神力品で説かれた偈の一部を書写したもので、大正蔵第 9 卷 52 頁（中）2 行目に対応する。「舌は梵天（の世界）にまで届かせられ、身からは無数の光を放っている」という意味である。親友高山樗牛の影響により日蓮研究に取り組んだ姉崎正治であったが、後代の「明治仏教」研究において内面的信仰を確立した人物として姉崎が取り上げられていることからうかがえるように、自身も日蓮の信仰を持つ一面も存在した。姉崎門下の濱田本悠（大正 7 年卒 1891-1971）が譲り受けたもので、この度、本研究室に寄贈された。

9 姉崎正治直筆戒名と題目

中央の題目は姉崎が日蓮の信仰を持っていた一面を示唆するものであり、左に記されたのはおそらく戒名である。彼自身の法名は鷲峰院嘲風日治大居士であり、墓は鎌倉市大町日蓮宗妙本寺に存在する。こちらも濱田本悠が譲り受けたもので、この度本研究室に寄贈された。

10 姉崎国連演説録音音声

1934年に東大を定年退職し国際連盟の学芸協力委員会の日本委員に就任した姉崎正治が、1936年の7月13日からジュネーブで開催された同委員会で行った演説の録音音声。西洋の科学文明と東洋の精神文明の対立は、実際には両洋が抱える近代化の問題でもあるという視点から、近代文明そのものの行き詰まりを考察している。録音時間は14分余りで、原稿の読み上げに基づいた落ち着いた調子のスピーチとなっている。

(高橋、p.9)

IAHR 関係資料 (解題：塩野谷恭輔)

11 第九回国際宗教学宗教史会議日程案

日程は研究発表をメインとする第一部と、旅行および旅行先でのシンポジウムをメインとする第二部とに分かれる。第一部は最初の3日間で終わり、会期の大半は第二部に割かれている。第二部では日光や鎌倉など4日間を関東で過ごしたのち京都・奈良を訪れるため関西に移動するが、新幹線開通前のこの時期は夜行で移動したとのことである。(東海道新幹線開通は1964年)

12 IAHR(ICHR1958) 参加者バッジ 七宝焼き

1958年IAHR東京大会の参加者に無料配布されたバッジ。古代エジプトを発祥としシルクロードを通じて中国へ伝わり、奈良時代までには日本へ伝わったという伝統的な金属工芸である七宝焼きで作られている。展示されているのは現物である。どうぞお手に取ってご覧ください。

13 RESEARCH TOUR TOKYO 封筒

1958年IAHR東京大会では、会議後にRESEARCH TOURと冠し、東京と京都を舞台に日本の宗教にゆかりのある場所を訪れる研修旅行が行われた。1955年結成のICHR組織委員会の企画によるものであり、封筒左上には第九回ICHRを示す参加者バッジと同じ記章が印刷されている。集合時間・場所について封筒表面の目立つ場所に記載するなど、組織委員会の細かな心配りが見てとれる。

14 GUIDE BOOK TOKYO

14～16は13の封筒の中に入った状態でRESEARCH TOUR参加者に配布されたと思われる。

GUIDE BOOKではツアーのルートから、靖国神社や明治神宮、立正佼成会といった訪れた宗教施設についての英文の解説が付されている。

15 RESEARCH TOUR PAPERS -TOKYO-

神道や仏教、新宗教など日本宗教についての論文が掲載されている。9月1日にサンケイ会館で行われた討議は、これらの論文を下敷きにしたものであった。執筆者は小口偉一や、神道学者として知られる阪本是丸の父にあたる阪本健一ほか。

16 IMPORTANT NOTICE

ツアーの諸注意。集合日時のほか、浅草寺など建物の中では靴を脱ぐようにといったような欧米とは異なる日本のマナーについて記されている。

17 RESEARCH TOUR NIKKO

RESEARCH TOUR の日光編。東照宮のほか、輪王寺、二荒山神社を訪れたようである。また、日光ツアーでは参加者は4つのグループに分かれて行動したとのことで、この封筒には参加者の割り振られたグループのリボンも封入されていたようである。

18 GUIDE BOOK NIKKO

東京編と同じく概要は旅程と訪れる施設紹介であるが、そのスケジュールを見ると分刻みの強行軍である。大勢のゲストを招いての旅行でよくこんな旅程を立てたものだと驚くが、不手際があったというような回想を見かけないことからして概ね上手くいったのであろう。

19 RESEARCH TOUR PAPERS -NIKKO-

訪れた東照宮、二荒山神社、輪王寺についての論文が掲載されている。8月31日のホテルでの討議はこれらの論文を下敷きにして行われた。執筆者は宗教民俗学で知られる池上広正や、津田左右吉の弟子であり輪王寺内の唯心院の住職も務めた仏教学者の福井康順ほか。

20 IMPORTANT NOTICE

旅程のハードさは組織委員会も認識していたようで、「出発に遅れたら自力で東武浅草駅までたどり着いてもらうことになること」や「時間の都合上、土産屋には寄らないでほしいこと」などが明記されており、疾走感のある旅行になったであろうことが想像される。また、「写真をたくさん撮りたいなら日光付近では買えないので予め予備のフィルムを買っておくように」というような注意書きは時代を感じさせる。

岸本英夫関係資料（解題：木村悠之介）

21 東京大学附属図書館改善記念

22 東京大学附属図書館改善記念式典次第

資料21～24は、1963年11月9日に行われた「東京大学附属図書館改善記念式典」の関係資料である。これらは資料21の封筒に入れられており、式典で配布されたものであろう。岸本が附属図書館長として3年のあいだ取り組んだ、「全学総合目録の作成」「附属図書館体制の確立」「指定書制度の強化」「総合図書館の近代的改装」から成る「岸本改善」は、ここに一段落することとなった。

姉崎も岸本も、東大図書館とは深い縁がある人物である。図書館とどう向き合うかという

ことは、研究や教育とどう向き合うかということに他ならない。昨年末に総合図書館の「閉館」問題が持ち上がった際、姉崎や岸本と図書館とのつながりに改めて想いを馳せた研究室の学生も少なくなかった。姉崎の図書館再建や岸本の図書館改善、そして現在進む新図書館計画とは、確かに同じ方向を向いていたはずである。

23 参観順路

24 改装記念 東京大学総合図書館案内

式典では館内参観が行われた。資料 23 の参観先の番号は、資料 24 のフロアマップに対応している。1 階②の目録室や 2 階①の閲覧室をはじめ、改善の成果を随所に見ることができる。

25 密葬式次第

図書館長就任前の 1954 年からすでに、岸本は癌との闘病を続けていた。式典の翌月 12 月 8 日には東大病院に入院することとなり、明けた 1964 年の 1 月 25 日、60 歳でその生涯を終えた。資料 25 ～ 34 は岸本の葬儀の関係資料である。これらを含む研究室蔵の資料群には、展示した柳川啓一（1926 ～ 1990 年）の弔辞手稿の他に、岸本三世（姉崎正治の娘で、岸本の妻）が柳川に宛てて送った礼状・絵葉書も含まれており、柳川の旧蔵資料が研究室に遺されたのだと考えられる。

1964 年 1 月 27 日、三鷹の岸本邸で密葬式が行われた。この「密葬式次第」には「古野先生が見えたらこちらへ御連絡下さい」と裏書があるが、古野先生とは友人代表として別れの辞を述べた古野清人（1899 ～ 1979 年）を指し、岸本と同じ 1926 年に研究室を卒業した宗教社会学者である。

26 [弔辞手稿]

密葬式の翌月 2 月 6 日、総合図書館において岸本の東京大学附属図書館葬が挙行される。密葬式で遺弟を代表したのが脇本平也だったのに対し、図書館葬で門下生を代表したのが柳川だった。弔辞手稿は全て残っているわけではないが、柳川がいくつかの段階を踏みながら推敲を進めていったことが見て取れる。以下、一部を抜粋する。

「図書館改装記念式の翌日、先生は、「今日から余生だ」といわれました。その余生は、僅か三ヶ月足らず、その多くを病院のベッドの上で、意識不明のまますごされました。」

「私どもには、宗教学の魅力の中に、たしかに、先生のお人柄の魅力が重なっていたように思われます。私どもを、叱咤激励するというよりは、暖く見守って下さいました。私どもの学問の上での成功や失敗のとき、相談にも、報告にも行く相手のない虚しさを、これからたびたび味わってゆくことだろうと思います。」

「先生は、学問の上でも、開拓者であり、はげしい破壊と建設をくりかえされました。しかし、先生の二十年間にわたる、宗教学の方法論という基礎工事はようやく終り、総合的な宗教学の体系の建設の準備はととのっているかにみえました。定年退官後のお仕事と考えておられました。それはついに未完成に終わりました。東西文化の比較についても断片にとどまりました。わたしどもは、先生の意図されたいろいろの分野にとりついて行きます。学説に無批判に従うことは先生のもっともきらわれたところでした。わたしどもは、先生の学説が、克服すべき対象であるかも知れません。しかし先生の学問的精神、自分の頭で

納得することと、科学的研究が宗教の意味をよりよく明かにできるという態度は、わたしどもにきざみこまれています。」

「先生は、死が無に帰するという前提の上に立って、自分自身の死と対決されました。しかし先生が「死が別れ」であるといわれるとき、私どもには、先生が長年手がけられた山岳信仰にあらわれる、死者が山へ入って行くというような具体的なイメージで思い浮べてしまいます。山道が見えがくれする先生の姿がだんだん小さくなってゆきます。わたくしどもは、いま、「先生さようなら」と申しております。どうぞ、もう一度お別れをいっているわれわれの方をふり返って手をふっていただくようお願いいたします。先生長い間の御指導ありがとうございました。」

27 葬儀次第（一案）

28 葬儀次第（二案）

29 東京大学附属図書館長教授故岸本英夫葬儀次第

葬儀次第も推敲が重ねられている。葬儀委員長は岸本の後を継いで図書館長となった薬学部教授の伊藤四十二（1909～1976年）、司会は東大附属図書館の事務部長であった青野伊予児が務めた。友人代表として、当時の前東大総長であり、総長時代に岸本へ図書館長就任を依頼した茅誠司（1898～1988年）と、岸本が図書館長就任を迷っていた際のロックフェラー財団人文学部長であり、岸本の心を決めさせた Charles Burton Fahs（1908～1980年）が弔辞を読んでいる。

30 東京大学附属図書館長 岸本英夫教授葬儀式場略図

葬儀が実際に図書館で行われたことを実感できる配置図である。式場は赤階段を上った3階の広場であり、祭壇が設けられたが、一方で2階の館長室（現在は改修工事の関係でコピールームとなっている）には「遺骨」と書き込みがあるように見える。

31 わが生死観—生命飢餓状態に身をおいて—

雑誌『理想』366号（1963年12月発行）に岸本が寄稿したものを、葬儀に際して図書館から小冊子として発行したものである。

32 日本の印象

岸本は図書館改善に先立ってアメリカの諸大学図書館を視察したが、この時に附属図書館の制度に関して岸本に大きな示唆を与えた人物が、当時ハーバード大の副図書館長を務めていた Douglas Wallace Bryant（1913～1994年）であった。資料32はその妻でラドクリフ研究所所長補佐を務めた Rene Kuhn Bryant（1923～2013年）が日本を訪れた時の印象を記したもので、附属図書館名義で発行されている。発行日は改善記念式典の日であるが、これも葬儀資料の中にあつたため、『わが生死観』と共に葬儀で配布されたものだろうか。

33 宗教の定義

「宗教とは、当事者にとって人生の究極的な意味を明らかにし、人間の問題の究極的な解決をもたらすと信ぜられるいとなみを中心とした文化現象である。(宗教現象は、その二次的特徴として、神観念や神聖性をともなう場合が多い。)」

岸本による宗教の定義で、こちらも葬儀で配布されたものであると考えられる。

「昭和 35 年 5 月第 2 版」とあるが、柳川啓一は、岸本の宗教学概論の授業では「昭和何年何月」という形で毎年修正される「宗教の定義」が配られていたこと、1960 年（昭和 35 年）にはロバート・ベラーを交えた討論会で定義が修正されたことを回想している。この討論会が井門富二夫の触れている、1960 年 3 月から宗教学研究室および図書館長室で行われたという「宗教の定義をめぐる諸問題」研究会を指しているかどうかということや、なぜ 1961 年の『宗教学』ではなく 1960 年の定義を葬儀では採用したのか、ということからは分からない。宗教学概論は 63 年まで教えており、最終講義というわけでもない。

なお、『宗教学』における定義は以下のようにになっている。

「宗教とは、人間生活の究極的な意味をあきらかにし、人間の問題の究極的な解決にかかわりをもつと、人々によって信じられているいとなみを中心とした文化現象である。」

「宗教には、そのいとなみとの関連において、神観念や神聖性を伴う場合が多い。」

34 創造 15(3,4)

1948 年に今岡信一良（1881～1988 年）と共に岸本が創設した日本自由宗教連盟（日本ユニテリアン協会が改称したもの）の機関紙で、1964 年 4 月 20 日に発行された号である。早稲田大教授で『創造』名誉主筆であった原一郎は一面の「故岸本教授の「無宗教葬」について」で、岸本の密葬式が自由宗教によってではなく「全く無宗教的な形式」で行われたことに関し（このため今岡は参列しなかったという）、その原因は、増谷文雄（1902～1987 年）ら岸本の葬儀を主催した東大宗教学の関係者には自由宗教に対する理解と共感がなく、また岸本の宗教思想の内容自体も深まっていなかったためであると述べており、岸本の人格を自我主義的として批判するまでに及んでいる。最後に原は、密葬式は「会葬者たちに与えた異常な「感銘」がその「宗教性」を十分に証明している」ため、「宗教的」な葬儀であったのではないかと結論付けている。

なお四面には、William Parsons Woodard（1896～1973 年）による岸本への追悼文が『国際宗教ニュース』から転載されている。

解説編

姉崎正治について

姉崎正治（あねさき まさはる、1873年－1949年）は東大宗教学講座の初代教授であり、日本宗教学会の初代会長である。しかし、生前における宗教学者、文筆家、国際派としての盛名とは対照的に、今日彼の名に言及がなされることは稀である。そこで本稿では、東大宗教学研究室に散在しながらも、近年ようやく本格的に整理・解読が進められた資料に基づく研究に即し、特別展示品に関連する事績に焦点を絞りつつ、姉崎の生涯について祖述を行う。

1873年（明治6年）、京都府下京区の浄土真宗佛光寺派の絵所をつとめる家に生まれた姉崎は、第三高等学校を経て1893年に帝国大学文科大学の哲学科に進学する。大学附属の寄宿舎では、幸田露伴、喜田貞吉、吉田賢龍、畔柳芥舟らと知己を得るが、なかでも文豪高山樗牛との親交は彼が夭折するまで続き、日蓮信仰（資料8・9）との出会いも樗牛を経由したものだ。1896年7月に帝国大学を卒業した姉崎は大学院に進学し、指導教授の井上哲次郎のもとで1897年にはデビュー作『印度宗教史』を刊行している。前後して1896年にはハーバードに学びユニテリアンの信仰をもつ岸本能武太とともに比較宗教学会を組織した。しかし、1900年に出版した初期の代表作『宗教学概論』で、比較宗教学 Comparative Religion（宗教現象の比較）から宗教学 Religionswissenschaft（宗教の包括的説明学）への立場の転回を鮮明にし、関心も初期のインド宗教史から日本神話論、仏教研究へと移行した。3年間の欧州留学とその後の4ヶ月のインド滞在を経て1903年に帰朝した姉崎は、前年に早世した高山樗牛を追懐するとともに、彼が傾倒した日蓮主義への関心を強めていき、在家の日蓮主義運動の指導者的存在だった田中智学や本多日生とも出会うが、彼らの国粹主義的な傾向に対し、その信仰は日蓮という宗教的人格に深く帰依する点で一線を画していた。1905年には東大宗教学講座の初代担任教授となり『現身仏と法身仏』『根本仏教』『宗教と教育』などに代表される学問的著作を世に送り出す一方で、1912年（明治45年）には仏教、教派神道、キリスト教を政府の指揮下に一堂に会させ国家の宗教介入と悪評されることになる三教会同を企画援助するなど、国家や社会秩序を支えるエタティストとして精力的に活動したことも注目に値する。その前後にも南北朝正閏論争への参戦（1911年）、宗教家教育家大懇親会の発案（1912年）など、天皇や国体論に対する積極的なコミットメントがみられる。他方で国際派としても名を馳せ、1913年（大正2年）から15年にかけてのハーバード滞在をはじめ海外での活動で得た幅広い人脈（資料4・5）は、関東大震災で全焼した東大図書館を復興すべく任命された図書館長（資料1）としての獅子奮迅の働きに活かされ、ロックフェラー財団からの400万円の寄付を可能にした。1930年（昭和5年）には日本宗教学会の初代会長（資料6）に就任する一方で、東大を定年退職後は新渡戸稲造の後を襲って1934年から5年間の任期で国際連盟の国際学芸協力委員会の日本委員（資料10）に任命されるなど、悪化の一途を辿る日本をめぐる国際情勢のなかで活動を続けたが、その後の歴史が教える通り、その影響は極めて微力だったと言わざるをえない。戦後は貴族院が解散するまで議員として戦後社会の再建のために奮闘し、1949年（昭和24年）7月21日、75歳の生涯を閉じた。

なお、本稿の記述は磯前順一・深澤英隆編『近代日本における知識人と宗教』（東京堂出版、2002年）に基づく。文筆家としての業績、姉崎と天理教との関係、キリシタン研究、聖徳太子信仰など、紙幅の都合上割愛せざるをえなかった姉崎の多様な側面については同書を参照されたい。

（佐々木弘一）

1958年 IAHR 東京大会についての諸問題

2005年にIAHR(International Association for the History of Religions)東京大会が開催されたことは記憶に新しいが、そこから遡ること47年の1958年にも東京・京都でIAHRの第九回国際会議が開催されている。戦後間もないこの時期に、先学たちが如何にして国際会議招致に成功したかについては『日本宗教学会五十年史』をはじめ多くの文献が残されている。詳細はそれらに譲るが、今大会の準備のため、こうした文献や東大宗教学研究室に残された大会当時の資料などに目を通していると、細かい名称や時系列の複雑さに狼狽させられた。そこで本稿では、これまで比較的気に留められることのなかったこうした用語の混乱について解説するとともに、1958年東京大会がもたらした差響きについても簡単に振り返っておくことにする。

IAHRの幕開けとされるのは1900年にパリで開催されたICHR(International Congress for the History of Religions)第一回国際会議である。尤も以後4年ごとにヨーロッパで開催されたこの会議は第二次大戦のため一時中断し、再開は1950年にアムステルダムで開催された第七回国際会議を待つこととなる。このとき初めて発足した国際学会としてのIASHR(International Association for the Study of History of Religions)は、翌年ユネスコ傘下に入ったことで国単位の団体で構成されることとなり、日本宗教学会はこの当初から学会として参加した。既に第七回国際会議から、日本宗教学会としては国際会議の招致を意図して接触していたという。1951年の天理大での学術大会会員総会では「第九回世界宗教史会議」の招致を目指す動議が可決され、53年には国際宗教学会議促進委員会が結成、55年ローマでのIASHR第八回国際会議にて日本招致案が可決された。背景には既に53年の段階で岸本英夫・ベッタツツォーニ(IASHR会長)・ブレイカー(IASHR事務局長)間の往復書簡で根回しが完了していたこともある。招致案可決を受け、日本側では国際宗教学会議開催準備委員会が組織された。IAHR(国際宗教学宗教史学会)・ICHR(国際宗教学宗教史会議)の訳出が公式に定められたのは、翌56年のことである。国際学会草創期に行われた度重なる名称改変による混乱は、56年以前の日本語資料においてはさらに訳語の未決定に増幅された。大まかには、国際学会として50年に発足したIASHRが55年にIAHRと改称され、その下で開かれる国際会議としてICHRがあり、その意味で1900年パリの第一回ICHRからの連続性を保っているという理解でよいだろう。

さて、50年の国際会議ではICHRの開催は5年ごとと決定されたが、ではなぜ58年というこの時期に東京でICHRが開催されたのか。筆者が資料から推測しうるのは①IAHRが発足して間もなかったこと②IASHR発足当初から日本が参加していたこと③53年の理事会で根回しが済んでいたこと④当時のIAHRが極東の学者のために東洋での開催が必要だろうと考えたこと、またこれを学術の国際化を志向するユネスコが後押ししたこと、などがこの中途半端な時期に招致できた大きな理由ではないかということだ。何れにせよ国際学会草創期においてこそ可能であったイレギュラーな対応であり、日本にとっては戦後復興の意味もあったかもしれない。そしてこの大会をきっかけにIAHRは東方への拡張を努力するようになる。

一方で、この大会は大きな学問上の問題も惹起した。東方への拡張努力というIAHRの決定は同時に、「東の学徒は直観、西は分析」と述べる西洋人学者のオリエンタリズムも白日の下に晒した。これを契機に、大会後の日本では「宗教の定義をめぐる諸問題」研究会など規範科学/記述科学の問題が論じられるようになった。そしてこのとき関連して提起され、1995年に不幸な形で再浮上することとなった宗教学者と宗教の距離感についての問題は、現在も依然として問われ続けている。

(塩野谷恭輔)

岸本英夫について

岸本英夫（1903～1964年）は、姉崎正治と共に比較宗教学会を立ち上げた岸本能武太の次男、そして姉崎の娘婿であり、1940年代の後半から60年代前半にかけて東大宗教学の中心となった人物である。岸本が研究室を卒業したのは1926年、卒業論文の題目は「祈りの問題」であった。1931年よりハーバード大に留学してJames Haughton Woodsのもとでヨーガスートラと神秘主義を研究しており、学位も「宗教神秘主義 ヨーガの思想と心理」（1946年）で取ることとなる。1934年に帰国して宗教学講座の講師となり、1945年に助教授、1947年に教授となった。講義では宗教心理・神秘主義・修行について教えており、門下生には柳川啓一や脇本平也らがいる。

柳川の回想によれば、岸本は1944年の講義においては簡潔に「宗教とは大いなるものにふれるよろこびである」と定義していたという。岸本はその他にもいくつかの「俳句のように余韻を残した短い定義」を打ち出したが、これが後期になると、主著『宗教学』に見られるような「長い、記述的な定義」へと転換する。柳川はその背景として、1952年の三度目の渡米を期に、岸本が社会学・心理学・人類学と並ぶ「宗教行動の科学的分析」として「レリジオロジー（宗教学）」の方法論を確立しようとしていたということを描いている。とはいえ、柳川自身は岸本への弔辞で、岸本による宗教学の体系化は未完成に終わったと述べている。

スタンフォード勤務時代の1954年に癌の告知を受けたことを契機として、「人間の問題」としての宗教観が大きくなっていくことも後期の岸本の特徴である。『死を見つめる心』をはじめとする文章で、ジョン・デューイの影響も見られるその死生観が示された。ユニテリアンであった父・能武太の影響を受けていたこともあり、1948年には今岡信一良と共に日本ユニテリアン協会（日本自由宗教連盟）・東京帰一教会を創設しているが、一方で禅やヨーガなどの東洋思想に対する関心も深く、宗教の類型として、例外的なものとしてではなく「神を立てない宗教」があると力説したこと、修行におけるような宗教体験を重視したことなども、岸本の思想の特徴として挙げられる。

岸本は学内外を問わず多くの役職に就いた人物であった。1945年のいわゆる神道指令の発令に至るまでの間、GHQ民間情報局の顧問に任じられて神社界とGHQとの折衝を行い、神社神道や靖国神社の存続に与したということはよく知られているが（「嵐の中の神社神道」に回想されている）、他には例えば1960年、総長に請われて東大の附属図書館長に就任し、後に「岸本改善」と呼ばれることになる大規模な改革を行ったということも特筆すべき事項である。岸本の考えは「大学における図書館の地位と責任」などに見ることができるが、岸本は「閲覧者代表」として、近代的大学図書館の使命は「本をどうしまっておくかということではなくて、どうすれば良い本を学生や研究者によく読ませることができるか」であると捉え、全学総合目録の作成（全学蔵書の一括把握）、附属図書館体制の確立（全学図書館室の一体的連携）、指定書制度の強化（教育連携）、総合図書館の近代的改装（開架化や閲覧室の拡充など）によって現在にもある程度繋がるような図書館整備を遂行した（岸本以外の図書館改善としては、80年代の裏田武夫によるものも重要である）。レファレンスや館外貸出の整備もこの時のことである。

この改善は1963年11月9日の式典（資料21～24）で一つの節目を迎えるが、その後すぐ病状は悪化、翌1964年の1月25日、岸本は60年の生涯を終えることとなる。自宅での「無宗教式」による密葬と、総合図書館での公的な「図書館葬」が行われた（資料25～34）。國學院大學日本文化研究所の所長に内定していたものの、その職に就くことはなかった。

なお、岸本は1960年にIAHRのAA（アジア・アフリカ）グループ委員長に就任しており、ユネスコから財源を獲得するなどICHR東京大会のためにも働いていた。（木村悠之介）

執筆者一覧

藤原聖子（大学院人文社会系研究科 教授）

担当：趣旨説明、姉崎正治関係資料解題（7）

佐々木弘一（大学院人文社会系研究科 修士課程1年）

担当：姉崎正治関係資料解題（1～6・10）、「姉崎正治について」

塩野谷恭輔（大学院人文社会系研究科 修士課程1年）

担当：IAHR 関係資料解題、「1958年IAHR 東京大会についての諸問題」

平田篤志（文学部4年）

担当：姉崎正治関係資料解題（8～9）

木村悠之介（文学部4年）

担当：岸本英夫関係資料解題、「岸本英夫について」

参考文献一覧

姉崎正治

磯前順一・深澤英隆編『近代日本における知識人と宗教』東京堂出版、2002年

高橋原「姉崎正治の国際連盟演説（1936年）」『東京大学宗教学年報』別冊（26）、2009年

「姉崎正治」、『国史大辞典』JapanKnowledge 版

IAHR

日本宗教学会五十周年記念事業委員会編『日本宗教学会五十年史』、日本宗教学会、1980年

井門富二夫「TMC 世代の宗教学展開をめぐって：1960年から1975年」、『東京大学宗教学年報』（29）、

東京大学文学部宗教学研究室、2011年

岸本英夫

前掲井門論文

奥山倫明「岸本英夫の昭和20年」、『東京大学宗教学年報』（26）、2009年

金子豊編『岸本英夫図書館関係著作集—大学図書館のあるべき姿を求めて—』、私家版、2015年

清水節「W・P・ウッダードコレクション所収「岸本英夫日記」について」、『日本学研究』（13）、

金沢工業大学日本学研究所、2010年

中村みどり「＜生命＞の発見：岸本英夫晩年の「宗教」」、『宗教研究』87(1)、日本宗教学会、

2013年

脇本平也・柳川啓一編『岸本英夫集』第一巻～第六巻、溪声社、1975～1976年

より詳しく知りたい方へ

一部展示資料を複製し会場にて配布しております。資料10の訳文及び原文も掲載しています。

また、研究室サイトにて展示資料の複製データと、関係資料の目録を公開しております。

発行：東京大学文学部宗教学研究室 発行日：2017年9月15日